

今月の谷口雅春先生のお言葉

素晴らしい神の子のいのちを認めてほめよう

親の尺度で子供を見てはならない

子供を育てて行く上に於て、先ず心得ておかなければならないのは人間は皆一様のものでないことであります。天分も異えば過去の念の集積も異う。吾々は過去何十回何百回と生れ更つてこの世に出て来ているのであって、その間に色々の体験を積み、色々の過去を持っていくのであります。だから双生児で生れた子供でも、同じ環境で、同じ人が同じ食物で同じ教育法で育ててもすっかり性質が異うことがあるのであります。ですから、子

供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分だけの尺度でもって判断しすぎて善悪を評価するといけないうであります。人間というものは皆個性が異う。個性が異うところにそこに価値がある。桜の花と薔薇の花とはどちらが美しいかという、これは評者の好き嫌いで定まるので、桜が一層美しいという人もあれば、薔薇が一層美しいという人もあります。それを自分だけの好き嫌いでもって、「お前桜のように、そんなに一晩で散るような淋しい姿じゃいかん。薔薇の花のようにならねばいかん」といったところが、それは出来ない事を望むのであります。桜は桜でその良さを認め、薔

薇は薔薇ばらでその良さを認めなければならないのであります。人を教育するには自分が「こう有ありたい」という一つの尺度ちかをもって、その尺度ちかに異ちがうものは皆悪いと、考え、お前は悪い悪いという批評を加えて行ゆきますと、その批評の言葉の力によって、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を心に植えつけられて、ついに折角せつかくの天才児も一個の劣等児になつてしまうのであります。

(新編『生命の實相』第47卷129～130頁)

子供の本当のすがたは神の子である

人間には仮かりの相すがたと本当の相すがたとがあるのです。仮かりの相すがたというのは(中略)、親が心で縛しばっているとそのために反抗はんたいするために、或あるは操行そうこうがわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影はんえいとして出て来る、これが仮かりの相すがたでありまして、本来その子の操行がわるいので学業の成績が悪いのでもないのであります。人間

の本来の相すがた、本当の相すがたは神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相じつそう、その本当の相すがたを見て、それを拝み出すようにしますと、拝むといつても、強あながち掌てを合わさなくても無論好よいのですけれども、心で子供を拝む。「うちの子供は本当に神の子であつて立派な子である。放つておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で拝むのであります。

(新編『生命の實相』第47卷56頁)

子供の神性をまず認めること

諸君は光がそこに輝き出せば陰影かげがそこにおのずから消える事実を見られたであろう。「存在の世界」に於おいては「認める」とは「光を点ずる」ことである。如何いかに潜在的に存在していようと、認めなければそれが存在していることが現実に見えて来ないのである。如何いかに多くの宝が庫くらの中に蔵しまわれていようと燈火とうしがそこになけ

ればその宝は無いに等しい。だから諸君よ、諸君の子供にそして諸君の教え子に宿っているとところの「神性」(神からの大遺伝)を認めることから始めよ。そして光が暗を逐い出すように、吾々がありありと彼に宿っている「神性」をば認めさえすれば、その「認める力」の輝きによって、如何なる悪癖も悪遺伝も数年のうちに根絶することは又難くはないのである。

(新編『生命の實相』第22巻170～171頁)

言葉の力で子供をほめよう

子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、汝の能力と性質とは神の姿に肖せてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであって、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲られている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親から折角頂

いた宝の庫を開かないで棄ててしまうものだ」こういう意味の話を時々言葉を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知りはじめる。そしてその「本当の自分」を実現することが彼の生涯の理想となり、従来の小さな虚栄や、小成に安んずる慢心や、狡利己心は消滅して、本当に彼は謙虚な心持で生長の本道を辿り得ることになるであろう。(中略)

如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる!」「きつと偉い人物になる!」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良化して行くことは吾々の為し得る、否為さねばならない義務であるのだ。

(新編『生命の實相』第22巻161～168頁)